

美濃庄遺跡

四反田地区

発掘調査概要報告書

1988.3.

大和郡山市教育委員会

序 文

美濃庄は、大和郡山市内にございます稗田、若槻等と並び、中世莊園の名称を現代に伝える歴史的な環濠集落のひとつとしてその名を知られております。

このたび、市内学校施設充実施策の一環としての市立平和小学校々舎の新築事業に先立ち、同地におきまして発掘調査を実施いたしましたところ、いにしえの都、平城京と関わりの深い川跡の検出をはじめとして、数多くの調査成果を得ることができました。本書は、その調査の概要を広く公開させていただこうとするものでございます。内容等には不備も数多いものと存じますが、なにとぞ度一読のうえ御教示賜わりますれば幸いであります。

なお、現地調査、あるいは本書作成において御執筆、御教示等賜わりました研究機関や大学の先生方をはじめ、調査全般におきまして御協力下さいました関係各位に対し、深く感謝いたします。

昭和63年3月31日

大和郡市教育委員会

教育長 井 上 三 夫

例　　言

1. 本書は、大和郡山市立平和小学校（大和郡山市美濃庄町262）内で、同校々舎新築に伴い実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 調査期間は、1次調査が昭和62年7月13日～同7月27日まで、2次調査は昭和62年8月24日より同10月6日まで実施した。
3. 現地調査は、大和郡山市教育委員会社会教育課が実施し、調査に係わる事務は同総務課が担当した。

・現地調査

〔調査員〕 技師 服部伊久男・山川均

〔作業員〕 中川憲、崎山庄勝、辻本修、岸田勝信、森田優、結崎茂信、西川信義、森村清春、増田高雄（敬称略）

4. 本書の執筆は、I～IV章を山川均が担当した。なお、VI章に関しては奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所）、趙哲濟（大阪市埋蔵文化財協会）両氏より玉稿を戴いた。
5. 現地調査、ならびに概報作成においては、上記した奥田、趙両氏の他に、下記の方々より貴重な御助言および御教示を頂きました。記して感謝いたします。

奈良国立文化財研究所 金子裕之氏

同 千田剛道氏

奈良県立橿原考古学研究所 中井一夫氏

同 楠本哲夫氏

同 朴 美子氏

大阪市立大学 粉川昭平氏

同 大井信夫氏

6. 本書の編集は山川が担当した。

本文目次

I 調査の契機および経過	1
II 位置および環境	2
III 調査の概要	3
1. 1次調査	3
2. 2次調査 ①川 跡	5
②南遺構群	8
(遺物) 1. 川跡内出土遺物	10
①古墳時代	10
②奈良～平安時代	12
2. 南遺構群出土遺物	16
IV まとめ	17
V 展望および課題	19
VI <付 章> 川跡内層序に関する報告	20

地質について

大和郡山市美濃庄村平和小学校地下の火山灰層対比

図表目次

図1 調査地点位置図	4
図2 トレンチ配置図	5
図3 第Ⅲトレンチ河床面検出状況	6
図4 南遺構群実測図	9
図5 川跡内出土遺物実測図1	11
図6 川跡内出土遺物実測図2 土馬	14
図7 川跡(第Ⅲトレンチ河床部)出土木器実測図	15
図8 南遺構群出土土器実測図	16
表1 若槻庄関連調査一覧	2
(奥田報文)	
図1 柱状図	21
表1 砂礫の粒度	22
表2 砂礫種の構成	22
(趙報文)	
図1 美濃庄村平和小学校火山灰採集地点柱状図	25
表1 火山灰の岩石記載的性格	26

図版目次

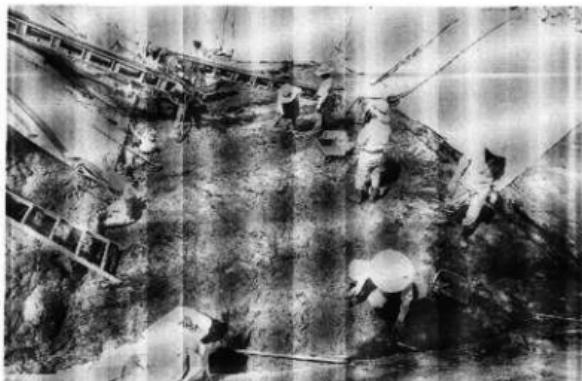
- 図版 1 1 調査地遠景（南上空より）
2 第2次調査トレンチ全景（南上空より）
- 図版 2 1 第Ⅲトレンチ河床面検出状況（南より）
2 第Ⅳトレンチ河床面検出状況（南より）
- 図版 3 1 第Ⅳトレンチ河床面検出状況（南より）
2 川跡南岸部分土層断面（東より）
- 図版 4 1 第Ⅳトレンチ南遺構群全景（西より）
2 第Ⅳトレンチ南遺構群全景（東より）
- 図版 5 1 SD-01土層断面（南より）
2 P-01遺物出土状況

I 調査の契機および経過

大和郡山市では、昭和62年度事業として、市内美濃庄町262に所在する大和郡山市立平和小学校の校舎老朽化に伴う校舎新築事業を策定したが、同校の所在地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「美濃庄遺跡」に該当するため、事業の事務担当課の市教育委員会総務課では文化財保護法第57条の3第1項の規定に基く「埋蔵文化財発掘の届出書」を、文化財担当課である市教育委員会社会教育課に提出した。社会教育課ではそれに基き関連機関と協議した結果、校舎新築事業に先行して遺構有無確認のための事前試掘調査を実施することとした。

試掘調査は昭和62年7月13日から同7月27日にかけて実施し、その結果、奈良～平安時代にかけての川跡を検出することができた。川跡内堆積土中からは土師器、須恵器をはじめとする土器類のほか、土馬、人面埴土器、模型カマド等の祭祀関係遺物も多数出土した。市社会教育課では、そうした結果を踏まえ、校舎新築事業に先行して、再度発掘調査が必要であるとの結論を得、それに対する事業担当課の了承を得た。

本調査は同年8月24日より同10月6日にかけて実施し、川跡の検出をはじめ、後述するような多くの成果を得ることができた。



調査風景（川跡掘り下げ作業）

II 位置および環境

美濃庄遺跡は、『奈良県遺跡地図』第3分冊、および『大和郡山市遺跡地図』に明示されている範囲によれば、東西、南北ともに500m以上の拡がりをもつ、比較的広範囲を占める遺跡である。遺跡は北を堀川、西を佐保川、南を菩提川によって区切られる肥沃な水田地帯の一画に拡がっている。今回の調査地点は、そのちょうど中央付近、小字名では「四反田」と呼称される地区にある。

過去に、この「美濃庄遺跡」と呼称される地域内では、発掘（試掘）調査が3回実施されている。ただし、そのうちの2者は、過去に「若槻庄関連3次調査・4次調査」として呼称されてきたもので、美濃庄遺跡に隣接して「稗田・若槻遺跡」が存在するためにややまざららしいが、それらはいずれも美濃庄遺跡の範囲内で行われた調査である（表1参照）。

この表1において、今回の調査に関連するものは、第1次および第4次調査において検出された奈良時代の人工河川である。この人工河川は、昭和51～52年にかけて実施された神田遺跡（現在は稗田・若槻遺跡と呼称される）の発掘調査によりはじめて確認されたもので、その標報中で、報告者である中井一夫氏は、現存する水田形態等によってこの人工河川の流路復元を行なった。その後、中井氏自らの手による発掘調査で、この人工河川は推定通りの位置より検出された。とくに表1中における1次調査では、人工河川が下ツ道と交差する地点が調査され、奈良時代の橋梁を検出するとともに、多くの祭祀関係遺物を河川中より出土し、注目を集めた。この奈良時代の人工河川と、今回の美濃庄遺跡の発掘調査で検出した川跡との関係については後に章を改めて若干触れてみたい。

次数	調査地	調査原因	調査機関	調査期間	調査概要
1	大和郡山市 稗田町 若槻町	宅地造成	奈良県立橿原考古学研究所	昭和55・9・10 昭和56・2・10	下ツ道側溝 奈良時代の人工河川と 橋梁・祭祀遺物群
2	若槻町	大和郡山市立 郡山東中学校新築 工事	"	昭和56・5・1 昭和56・7・15	中世の掘立柱建物・井戸
3	若槻町	宅地造成	"	昭和56・7・20 昭和56・12・16	環濠をもつ中世の屋敷跡・井戸、土坑古墳～ 奈良時代の自然河道
4	若槻町	"	"	昭和57・9・1 昭和58・1・14	縄文時代晚期の自然河道 奈良時代の人工河川
5	若槻町	大和郡山市立 仮称「童の館」新 築工事	大和郡山市 教育委員会	昭和61・5・8 昭和61・5・31	若槻池堤体

表1 若槻庄関連調査一覧（註①文献より転載、一部加筆）

こうした奈良時代の人工河川に関わる調査の他に、美濃庄遺跡の範囲内においては、今回の調査地の北側にある市立平和保育所建設の際に試掘調査が実施されており、その際には弥生時代後期の自然河川が検出されている。^⑨また、今回の調査地の北方においては昭和48年の農免道路拡張事業に伴い、側溝工事現場より弥生時代前期の土器を含む包含層が確認されている。^⑩

さて、美濃庄遺跡は、人和郡山市美濃庄町に所在する遺跡であることからその名称を冠せられた遺跡であるが、美濃庄町はその名が示すように鎌倉時代においては興福寺一乗院を領主とする、莊園であった地である。嘉祐2(1226)年の「勸学院政所下案内」(『鎌倉遺文』)中に「(京南三条)二里四坪・美乃庄」の記載があり、この「美乃庄」が現在の美濃庄町に比定される。ただし、この時期においては領主は不明で、その後、応永6(1399)年の「興福寺造営段米田数帳」(『春日大社文書』)中に「一乘院方 美濃庄十八町五段」の記載があり、このころには美濃庄は興福寺一乗院領となっていたことがわかる。その後慶長期(1596~1615)には美濃庄村全体が一乘院領と表記されるようになる。

現在、美濃庄村は、大和盆地に散在する環濠集落のひとつとして知られている。

III 調査の概要

調査は、既述したように試掘調査を経た後に本調査を実施しているが、調査期日の都合上、同一地区を重複して開削することは避け、試掘、本調査はそれぞれ別個の位置にトレンチを設定した(図2参照)。そのため、実際は調査対象地域を、地区ごとに2回に分けて発掘した形となっている。したがって、試掘・本調査という呼称は適切ではないと考えるので、以下においては美濃庄遺跡四反田地区1次・2次調査としてそれぞれ呼称したい(単に1次調査、あるいは2次調査と呼ぶ場合も同義とする)。以下に、1次・2次調査において得られた知見を略述する。

1. 1次調査

調査は、対象地に対し東西方向に、南北2本のトレンチを設定して行なった。このうち北側のものを第Iトレンチ、南側のものを第IIトレンチと称する。調査にあたっては、まず盛土(学校用地造成時のもの)、旧水田耕土および床土を除去することにより開始した。その結果、調査地全面より河川堆積に由来することが明瞭な灰色粗砂層面を検出し、砂層中には若干の土器片を確認したので、発掘期日の都合上、その一部に関して河床面に至るまで人力掘削を実施した。図2中、点線で示したのが1次調査においては完掘を断念した区域である。

1次調査では、トレンチ全域がほぼ河道内に含まれたが、第IIトレンチではその南壁で川岸部(南岸)を確認した。これは、壁面の観察によりほぼ東西方向に延びるものであることが知られた。また、河川の北岸部分については第Iトレンチにおいても確認できなかった。このことから、川跡は少なくとも34m以上の幅員(河川敷)を有するものであることが理解された。河川の深度は約1mである。



図1 調査地点位置図 (S : 1 / 10,000) (A・稗田・若槻遺跡、B・美濃庄遺跡、C・発志院遺跡、D散布地 数字1～5は「表1」に対応する。矢印が今回の調査地点)

なお、1次調査における出土遺物は、大半が川跡内より出土したものなので、後に2次調査における川跡内出土の遺物とあわせて「川跡内出土遺物」として一括して報告する。

2. 2次調査

①川跡

2次調査では、1次調査で得られた知見に基き、対象地に南北方向にトレンチを設定した。これは、1次調査において川跡がほぼ東西に延びるものであることが確認されたので、その南岸、および北岸の検出を意図したものである。なお、埋設水道管を避けるために、トレンチはやむなく2本に分けることになった。このうち北側を第Ⅲトレンチ（1次調査との混同を避ける意味で統称する）、南側を第Ⅳトレンチと称する。

調査の結果、川跡の南岸部分については予想通り検出されたが、北岸部分については、トレンチを1次調査のものより若干北へ延長したにもかかわらず未検出に終わった。このことにより、川跡の河川敷の幅員は39mを超えることが確実となった。川の深さは1~1.5mを測った。以下、便宜上、検出された川跡の状況をトレンチごとに略述する。

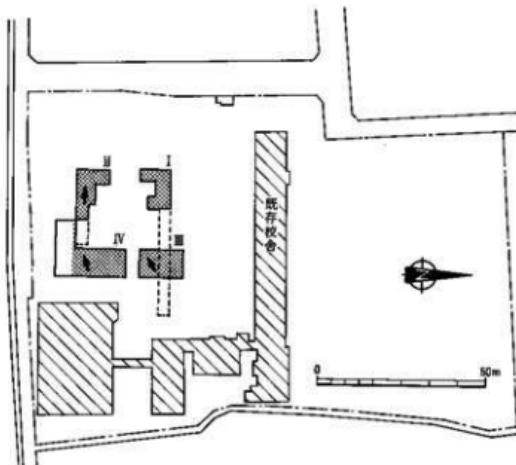


図2 トレンチ配置図（トーン部分は川跡検出部位、矢印は推定流路方向 S : 1/2,000）

図3は、第Ⅲトレンチにおける川跡の河床面の検出状況である（図版2-1参照）。河床の浸食状況により、川跡の旧流路方向が推定可能だが、図等により明らかのようにそれは北東より南西へ、方眼方位に対し斜方向に流れるものである。

また、図3中のトーン部分の落ち込みは、古墳時代前期の土器のみを出土した地点である。当該期の自然河道の痕跡と考えられるが、奈良時代の流路とは、やや流路方向が異なるようである。

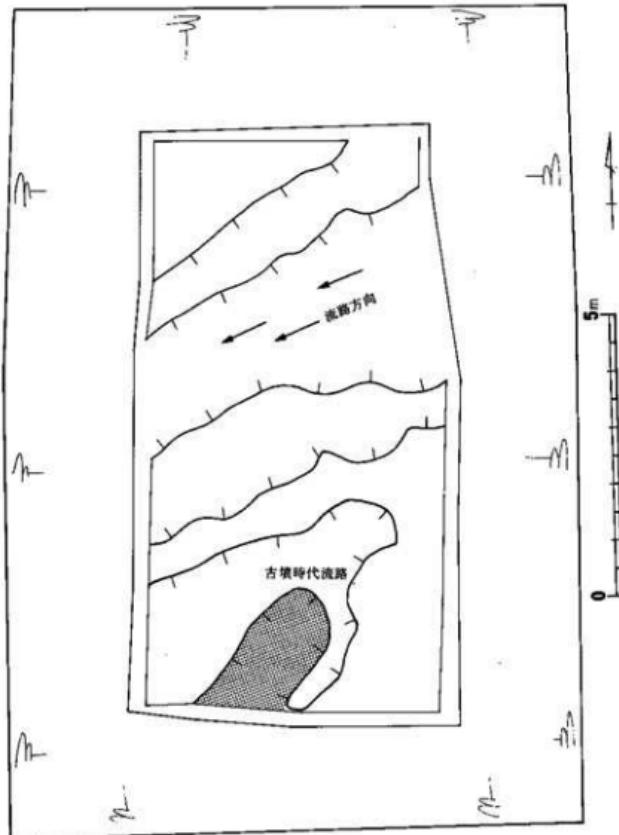


図3 第Ⅲトレンチ河床面検出状況 (S : 1/100)

この第Ⅲトレンチからの出土遺物は、奈良時代の土師器、須恵器のほか、祭祀関係の遺物も多数出土している。上馬、模型カマド、人面墨書き土器のほか、刀形?等の木製品があり、またヒョウタントや栗の実も出土している。また、上層からは神功開宝が1枚出土した。

その他の遺物として、前述の通り古墳時代の流路痕跡と思われる落ち込みからは布留式期の土師器がまとまって出土した。

第Ⅳトレンチにおいても、第Ⅲトレンチと同様に川跡を検出した。さらにこのトレンチにおいては既述のように、川の南岸部分も検出された。また、ここでは出土遺物によって検討すれば、南へゆくに従い遺物相が新しくなってゆくことが確認された。すなわち、流路は徐々に南下したものと考えられる。川跡南岸付近では、奈良時代の遺物はみられず、平安時代の遺物が大半を占めるようになる。川床面は第Ⅱトレンチでみられたような激しい浸食作用は受けておらず、ごく平坦である。

出土遺物には奈良～平安時代初めにかけての土師器、須恵器に混在して、少量ではあるが鉛釉陶器や灰釉陶器もみられた。祭祀関係遺物では土馬、模型カマドのほか、製塙土器の破片も若干出土した。また、川の浸食作用に伴う流入遺物として、古墳時代前期から後期にかけての埴輪や須恵器が出土している。これらは調査地付近に存在したと思われる古墳、あるいは集落址に由来するものであろう。このほか、流入に関する遺物として少量の弥生土器やサヌカイト片もみられた。

川跡の流路方向については、既述の第Ⅲトレンチでみられた河床部分の浸食状況より判断するならば、北東方向から南西方向へ、南に対し西へ約45度の角度で流れているものと考えることができる。しかし、2次調査で確認された川の南岸部分、あるいは1次調査においてみられた両岸部分は、ほぼ東西方向に延びるものであった。したがって、北東方向から斜に流れてきた川は、ほぼ今回の調査地のあたりで真西方向へ整流されていたものと考えることができる。この場合、南岸部分は強く川の浸食作用を受けることとなるので、南岸部分は徐々に南下したものではないかと思われる。このことは先記したように、出土遺物が南にゆくほど新しいものになることからも裏付けられよう。

つぎに、この川の機能した年代についてであるが、その上限についてはあまり明確にできる資料がないが、第Ⅲトレンチ下層より神功開宝が1枚出土しているので、その鋳造年代（初鉄765）前後にはすでにこの川は機能していたものと考えられる。

また、この川の廃絶年代については、第Ⅳトレンチにおける川跡内最上層でみられた土器（古墳時代のものを除く）が平城京東三坊大路側溝（SD650A・B）を標式とする様式SD650A、およびB様式であることより、これをおそらくとも9世紀後半として考えることができる。これは、先記した稗田・若槻遺跡において検出された川跡の最上層より競益神宝（初鉄859）が出土している点とほぼ共通する。^⑦

以上のように、この川は奈良時代を中心とし、平安時代はじめにはその機能を失ってしまう。また、出土遺物中に多くの祭祀関係遺物がみられる点は興味を引くが、そうした面も含めて、この川の性格等については後章において若干の検討を試みてみたい。

②南遺構群

第IVトレントにおいて、川の南岸部分が検出されたが、それ以南では黄褐色粘土層のベースを主体とする遺構面が展開している。ここではそれを一括して「南遺構群」と称することとする。以下に、南遺構群中、主要なものについて略述したい(図4参照)。

(1)弥生時代

<SD-01>(図版5-1) 幅70~100cmの、西側に向けてゆるやかに彎曲する溝であるが、今回検出されたのは総長約5mであり、遺構はさらに南に向かって延びるものと考えられる。なお、溝の北端は川により浸食されている。溝の断面形状は逆三角形状を呈しており、深度は最深部において約80cmを測る。

このSD-01の帰属する時期については、溝内より近畿I(新)様式期に属する壺の破片が出土したことから、弥生時代前期のものとすることができる。今回の調査区域内においては、唯一の弥生時代の遺構であるが、第Ⅱ章で触れたように、今回の調査区の北側においては、かつて弥生土器(I様式・新)が採集されているので、付近には弥生時代の遺構が遺存している可能性もある。

(2)古墳時代

南遺構群において検出された遺構の大半は、古墳時代中、後期(5~6世紀)に属するものである。とくに図示した南遺構群の南東部分は遺構面が南に向かってゆるやかに傾斜しており、上部に須恵器編年上のTK-43様式期を中心とする包含層を形成している。これを除くと柱穴と考えられるピット群が検出されるが、ピット中より出土する遺物は大半が細片に限られ、しかも出土量がごく僅かなのでそれらの時期を認定することは難しいが、P-01として図示したピットからは図8-31の土師器鉢が出土しており、この土師器は先述した包含層の時期にやや先行する時期のものである。もちろんこれが直ちにピット群等の古墳時代遺構の上限を示すものではなく、たとえば後記するSX-01から出土した土器は、さらにP-01の土師器より古い時期のものである。

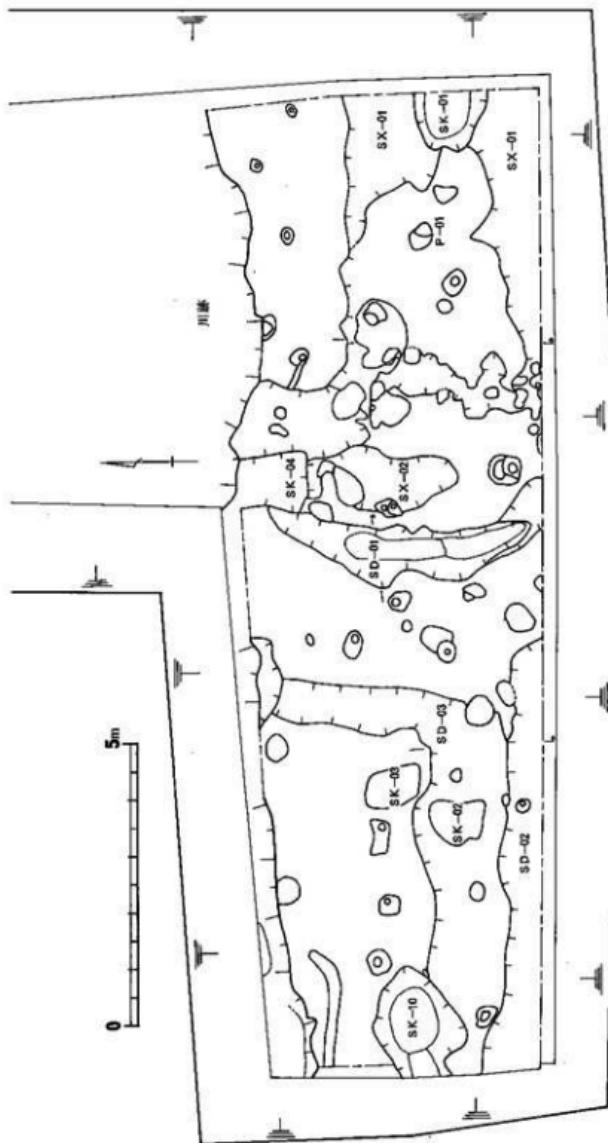
以上のように、今回確認された、南遺構群における古墳時代の遺構は、5世紀前半~6世紀前半に属するものと考えて大過ないようと思われる。以下に、これらの遺構のうちの代表的なものを報告する。

<SX-01> 深さ10~20cm程度の、浅い不定形の溝状遺構である。ただし、遺構は北にゆくに従い徐々に浅くなるため、その北端については不明瞭である。図8-29が、このSX-01より出土した遺物である。

<SK-01> SX-01を上部より掘りこむ形で掘削されている土坑である。トレント東端より検出されたためその東半分は未検出。南北径は130cm、深さは約30cmである。遺物には須恵器や土師器の破片があるが、なかにカマド形土器の破片が含まれている。

<SX-02> 深さ10cmに満たない不定形のオチコミ状遺構である。遺物には須恵器、および土師器の細片がある。

図4 南道橋群実測図 (S : 1 / 100)



<SK-04> SD-01およびSX-02の北縁を切るかたちで掘りこまれた方形の土坑である。北半は川跡により浸食されているため、全体の規模は不明。深さは10~20cmを計る。遺物はほとんど出土しなかったものの、川跡に先行する遺構であることは確実なので、いちおう古墳時代の遺構に含めておきたい。

<SD-03> 途中で90°に屈曲する、東西、および南北方向の溝である。幅は東西方向の部位が約130cmを測るのに対し、南北方向の部位は約80cmと狭くなる。深さは全体的に10cm足らずで、比較的浅い溝である。溝の北端は他の遺構や川跡のため不明で、また西側はトレンチ外になるため、溝が全体としてどのような形状を為していたのかは明瞭ではない。

この遺構の所属する時期については、遺物の出土量が限られたため判然としないが、遺構相互の切り合い状況の観察より、後述のSD-02には先行するものであることが確認された。

<SD-02> 深さ10~15cmの、比較的浅い溝状の遺構である。南端がトレンチ外のため、全体の形状は不明。遺物には6世紀初頭の須恵器および土師器（ともに破片）がある。

<SK-02> 長径100cm、短径80cm、深さ約10cmの不整形の土坑である。既述のSD-03を切りこむ形で掘削されている。遺物には6世紀初頭の須恵器および土師器（ともに破片）がある。

<SK-03> 50×100cmの、長方形の土坑。深さは約15cmを測る。遺物には須恵器、土師器の小破片があるが、詳細な時期は不明である。

(3)鎌倉時代

鎌倉時代に属する遺構としては、土坑および素掘り溝がある。このうち土坑からは13世紀中頃のものと思われる瓦器碗が出土している。これらの遺構はII章で触れた莊園「美濃（乃）庄」と関連する遺構と思われる。

<SK-10> 長径200cm、短径170cmの不整形の土坑である。深さは最深部で約40cmを測る。この土坑SK-10は、その西側で土坑に付帯するかたちで溝状遺構（深さ約30cm）と接続しているが、溝状遺構は調査区域外へ延びるため、詳細は不明。遺物には13世紀中頃の瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿がある。

〔遺物〕

1. 川跡内出土遺物（図5~7）

川跡内より出土した遺物には、弥生時代から平安時代に至るまで、土器を中心として多くの種類がある。そのなかでも大多数を占めるのは奈良~平安期の遺物であるが、既述の通り奈良時代の川跡に先行して、古墳時代前期の流路も確認されており、そこからは布留式に属する古式土師器が出土している。また、川跡南岸部付近では川の浸食作用に由来する古墳時代の遺物も多くみられる。ここでは、それらのうちの主なものを時代順に列記してみたい。

①古墳時代

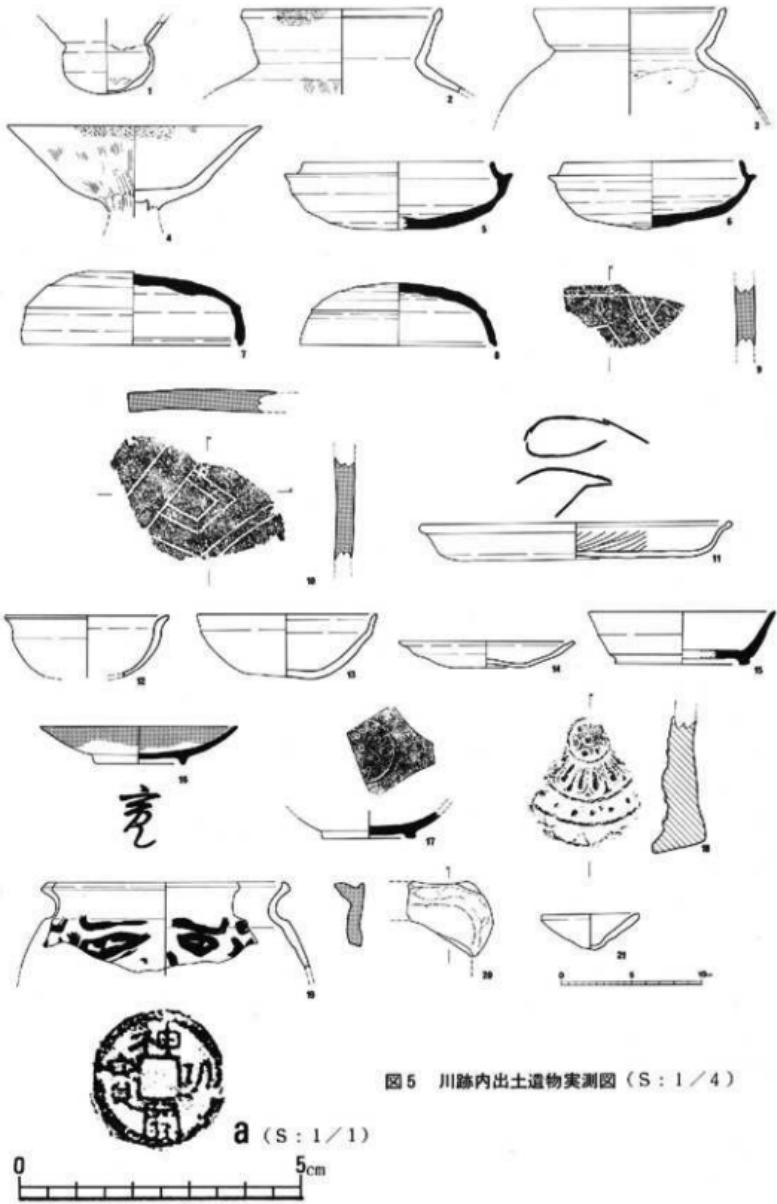


図5 川跡内出土遺物実測図 (S : 1 / 4)

a (s : 1 / 1)

A horizontal number line starting at 0 and ending at 5. There are six tick marks on the line, including the endpoints. The segments between the tick marks represent intervals of 1 unit each.

<布留式土器>

古墳時代に属する遺物としては、まず既述したように古墳時代の旧流路中より出土した一群の土師器がある（図5-1～4）。

1は、いわゆる小型丸底鉢である。外面は体部上半から頸部にかけて横位の細かいヘラミガキを施し、体部下半以下はヘラケズリを施している。内面は頸部を丁寧なヨコナデ、体部はヘラによる粘土カキ取りで器厚を減じた後、粗くナデしている。なお、内面には頸部と体部の接合痕を残す。

2、および3は甕である。いずれも体部下半以下を失す。口唇部は内面に肥厚する。頸部以上は内、外面共にヨコナデし、体部外面はハケメ調整、内面は横位のヘラケズリによって器厚を減じている。

4は高杯である。脚部以外は消失。体部下半よりゆるやかに屈曲する。外面はハケメによる調整の後、部分的にヨコナデを施す。内面にはヨコナデ、およびナデによる丁寧な調整が施される。なお、脚部との接合部分には縦位のヘラケズリがみられる。

<須恵器>

ここに報告する古墳時代の須恵器は、いずれも川跡の南岸付近より出土したもので、川の浸食作用に由来すると考えられる遺物である。本来は近在した何らかの遺構に関連するものであろう。

5および6は杯身である。比較的小型の体部に、短かく何傾した立ち上がりを有している。底部外面にロクロケズリがみられる他は調整はロクロナデによる。

7および8は杯蓋である。比較的小型で、外周にはぶい稜をもつ。調整は天井部外面のロクロケズリを除き、全面にわたりロクロナデが施される。

<形象埴輪>

古墳時代の遺物としては、上述の須恵器の他に形象埴輪の破片があるが、これも川跡の浸食作用に伴う遺物と考えられる。

9および10は、ともに同一個体の形象埴輪（蓋形埴輪）の飾羽根の部分と思われる破片である。表面には線刻により直弧文を描いている。この埴輪片は上述の須恵器より時期的にやや先行するものであり、おそらく調査地付近にかつて存在したと思われる古墳からの出品であろう。

②奈良～平安時代

ここに報告する、川跡内出土の奈良～平安時代の遺物については、全てが川に対し廃棄、あるいは祭祀に伴い意識的に投入されたものと考えられる。すなわち、これらの遺物はこの川の時期を決定するうえで重要な要素となる。遺物には須恵器、土師器、黒色土器のほか、鉛釉陶器、灰釉陶器、軒丸瓦を含む瓦類、さらに祭祀に関わる遺物として土馬、模型カマド、人面墨描土器、製塙土器がある。

<土師器>

11は皿（A）である。体部断面はゆるやかに外彎し、口唇部は内面に肥厚する。内、外面ともに

ナデ、あるいはヨコナデが施され、器表面は平滑な仕上がりを見せるが、底部外面には若干の指頭圧痕を残す。なお、内面には連弧状および放射状暗紋が描かれている。

12および13は碗（C）である。体部断面はゆるやかに外彎し、口縁部付近でゆるく内側に屈曲する。調整には主としてヨコナデが用いられているが、やや粗い仕上がりで外面には指頭圧痕を残す。

14は、川跡内南岸付近の川跡内最終堆積層中より出土した土師器小皿である。屈曲する体部をもち、器厚はごく薄い。体部より上はヨコナデ、底部はナデが施されるが、とくに外面の調整は粗い仕上げである。

＜須恵器＞

川跡内出土の奈良～平安時代の須恵器は、杯身および杯蓋が大半を占め、甕（破片）がそれに次ぐ。

15は杯身である。高台を有するタイプ（杯A）に属する。調整は内、外面共にヨコナデを用いる。

＜灰釉陶器＞

川跡内出土遺物中、相対数は高くないものの、灰釉陶器、または鉛釉陶器も若干出土した。いずれも川跡南端、最終堆積層中よりの出土である。

16は皿（B）である。体部外面は丁寧なロクロケズリ、他の部位はロクロナデを施した精緻な土器であり、体部より上に施釉がみられる。なお、底部外面には墨書（1字。字体は不明）がある。

17は破片のため全体の器形は不明であるが、底部外面以外は全面にわたり施釉がみられる、精緻な土器である。底部内面には線刻による花紋をもつ。

16および17は、ともに平城京東三条大路側溝（S D650）内出土の灰釉陶器に類似する資料である。両者は川跡内の最終堆積層出土資料であることを考えると、この川跡の廃絶した時期をおそくとも9世紀後半としてとらえることができよう。

＜瓦＞

川跡内出土遺物中、瓦の占める割合はごく僅かである。ここではそのうちの蓮華文軒丸瓦を1点図示しておく（18）。破片のため全体は不明であるが、管見資料によれば平城宮出土軒丸瓦6284型式に同形の可能性がある（現物未照合）。

＜祭祀遺物＞

川跡内出土遺物中、約1割を占めたのが祭祀関係の遺物（土馬、模型カマド、人面壘描土器、製塩土器）である。これらは、いずれも完形品はみられず、全て一部を欠失するか、あるいは破片による出土である。

・土馬（図6）

22は、頸部以上、および3脚を欠失している。背部から脚部にかけて壘描により鞍、および尻繁の表現がある。

23および25は頭部のみの出土。いずれも月は竹管状工具の刺突により表現する。

24は胴部以下を欠失する、比較的小型の土馬である。時期的にも他のものに後出する資料である。側頭部に馬具を表現したとみられる墨描がある。

・人面墨描土器

19は1次調査において出土した資料である。人面墨描土器の出土は、1次、2次調査を通じてこの1点にとどまる。土器は下半部を欠失しており、遺存した上半部には目、および眉の表現がみられる。器種は壺で、外側は頸部ヨコナデ、胴部以下は不整方向のナデ、内面は頸部は粗いヨコナデ、以下は布？を利用してした強い押捺調整を施している。

・模型カマド・瓶

20は模型カマドの破片である。内・外側ともにナデ調整を施すほか、部分的にヘラ状工具を用いた面取りがみられる。縦部分は粘土帯を形成したもので、指頭圧痕を残す。

21は瓶を意識したと思われるミニチュア土器である。内・外側ともにヨコナデ調整を施している。

<錢貨>

第2次調査において、第Ⅱトレンチ下層より神功開宝（図5-a）が出土した。直径25mm、最大厚は1.5mmを測る。銘上りは悪く、字体はやや不明瞭である。

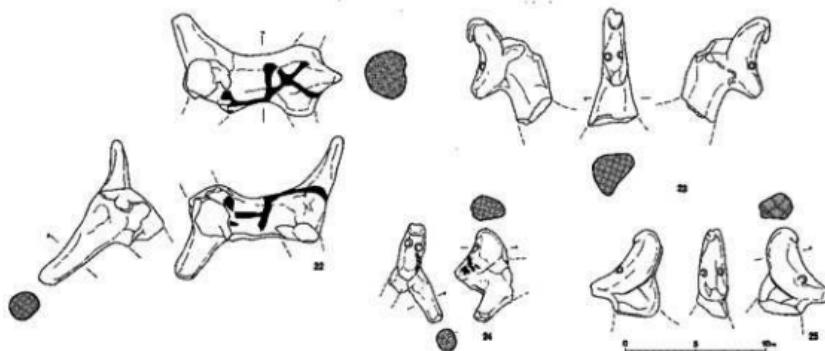


図6 川跡内出土遺物2 土馬 (S : 1/4)

<木製品>

ここにあげた木製品は、いずれも第Ⅲトレンチ河床部分より出土したものである。出土地点が既述の布留式期自然流路に近いため、時期の認定はやや困難であるが、調査時の知見に基けば、これらの木製品は奈良時代に属する可能性が高い。

M-2は、目の細かいヒノキ材による、厚さ約1cmの板材を用いた木製品である。頂部に幅2cm、長さ3.6cmのホゾを造り出している。図示した左側を刃部ふうに細く削り出しており、このことは

この木製品が刀形木製品の本体となる可能性が高いことを示す。残存する全長30.7cm、幅は5.3cmを測る。

M-3は、カシ類の堅木を用いた木製品である。精緻な技術に基き頭部を刻出している。この木製品は、その形状より推して刀形木製品の柄部の可能性がある。全長24.5cm、幅4.4cm、厚さ1.9cm。

M-1は、目の細かい針葉樹材を征目取りした厚さ約2cmの板材を加工した木製品である。脚付の机、あるいは椅子の脚台と考えられる。全高16.4cm、全幅20.6cm、脚の長さ3.6cmを測る。

M-4は厚さ約1.5cmのヒノキ材の板材を用いた木製品である。図示した下部に、右側に偏して 3×9 cmのホゾ穴、および上部には 3×3 cmのホゾ穴を2つ並べている。全長96cm、下辺18cm、上辺7cmを測る。

2. 南遺構群出土遺物

①包含層内出土遺物

26は土器の小型丸底鉢である。外面は頭部ヨコナデ、体部は剥落が著しいが、部分的にハケメ

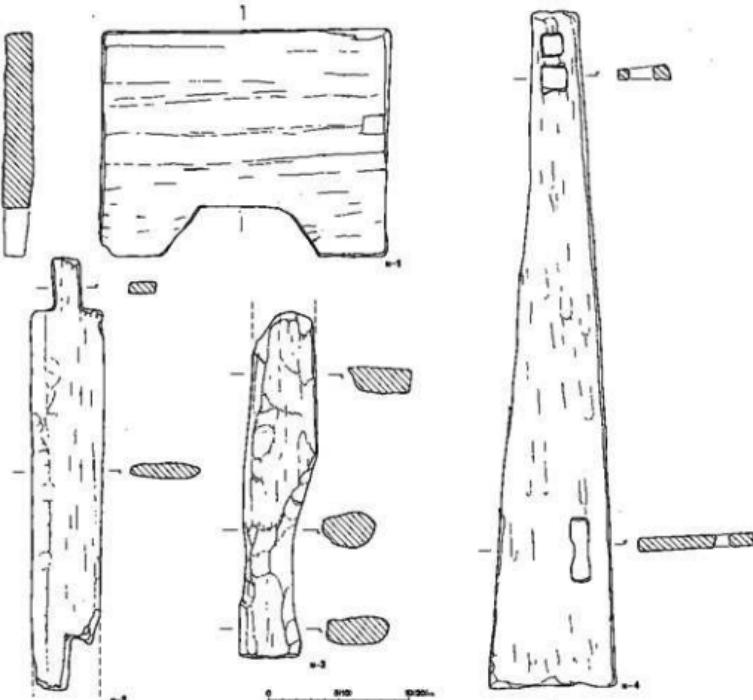


図7 川跡（第IIIトレンチ河床部）出土木器実測図 (S : 1/4 ただしM-4のみ1/8)

を残す。内面は頸部ヨコナデ、体部は指頭によるオサエおよびナデ調整を施している。なお、頸部と体部の接合部分には回転ヘラケズリを施す。

27は土師器高杯である。脚部のみの遺存で、円形の透し孔がみられるものである。断面形状はゆるやかに外彎するもので、明瞭な屈曲点はもたない。内・外面ともにナデ調整を施す。

28は土師器直口壺である。体部以下は欠失。外面は剥落が著しいため調整は不明だが、頸部の一帯にハケメを残している。内面は頸部が板状工具を用いたヨコナデ、体部は指頭によるナデを施す。なお、体部内面には煮沸使用に伴う炭化物が付着している。

30は須恵器杯身である。外面は上半部にロクロナデ、下半部にロクロケズリを施す。内面は全てロクロナデ調整である。

② S X-01出土土器

29は須恵器碗である。外面は口縁部、および体部をロクロナデ、頸部はカキ目、底部にはロクロケズリをそれぞれ用いている。内面は頸部から体部上半にかけてをロクロナデし、下半部（底部を含む）はロクロケズリを施す。

③ P-01出土土器

31は土師器鉢である。内、外面ともにヨコナデ調整を施す。

④ SK-10出土土器

瓦器（32）を1点図示する。調整は口縁部および高台接合部をヨコナデ、他はナデが施される。ヘラミガキはやや粗く、外面にも一部及ぶものである。底部暗紋は退化した連弧文が描かれている。川越俊一氏編年（^⑨）のIII-B型式（13世紀中）にほぼ該当するものである。

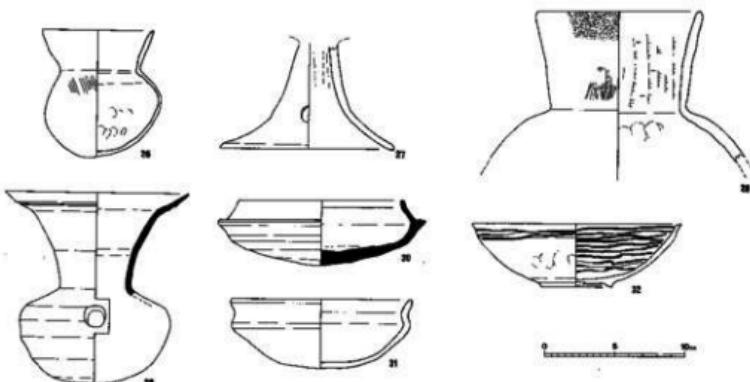


図8 南遣構群出土遺物実測図 (S : 1 / 4)

(26・27・28・30、包含層、29. S X-01、31. P-01、32. SK-10 S : 1 / 4)

IV まとめ

前章までに、今回の美濃庄遺跡において得られた知見の概要を述べてきたが、本章ではそれらを簡略に総括してみたい。

(1)川跡について

今回の調査で得られた知見のうち、川跡に関するものは以下の3点に要約することができる。

①存続年代

この川は、奈良時代前半にはすでに機能しており、平安時代はじめ（9世紀後半）に廃絶するものである。

②方向性

川の方向は、北東方向から南西方向へ、方眼方位に対し斜に流れるものであるが、今回の調査地付近ではそれを真西方向に整流している可能性が強い。

③性格および機能

川の性格については、推測による他にないが、現時点においては平城京に関連する運河として考えておきたい。すなわちその主たる機能としては、物資の運搬や京内外の排水があげられる。また、副次的な機能として、土馬や模型カマド等の祭祀関連遺物が多く出土したことより、祭祀の場としてのそれがある。

以上の3点より、この川が平城京と密接な関係にあることが知られる。すなわち、①の点より考えて、この川は平城京とともに機能し、平城京への遷都後は徐々にその機能を失い、9世紀後半には埋没してしまうものとすることができるし、③のうち、祭祀関連遺物が大抜等の国家的な意志に基く祭祀に伴うものであるとする説に従うならば、この川が平城京と有機的に関連するものであることを別の面から補強することとなろう。

なお、②については、Ⅱ章で触れた中井一夫氏復元の奈良時代人工河川との関係をまず考えねばなるまい。中井氏の復元案によれば、人工河川は今回の調査地のやや北方を流れていたこととなる（図9参照）。この復元流路はその後、発掘調査によりその正確さが確認されているように、きわめて精度の高いものであるから、今回の川跡を中井氏による人工河川と直接結びつけることは不可能であるが、既述の通りこの川跡もまた平城京と密接に関係するものであることは明らかであり、その存続年代も中井氏による人工河川とごく近似することにより、今回検出された川跡は、中井氏による復元流路を「主流」とするならば、いわば「支流」にあたるものと考えられる。したがって、③においても記したが、今回の川跡は、平城京の都市計画と密接に関連する、人工開削による運河として捉えるのが適切であろう。

また、②に述べたように、この川は北東方向より流れ来て、調査地付近で真西方向にその流れを変えるものと考えられるが、この川がより上流、あるいは下流ではどのような方向性をもつものかは、今後周辺地区の調査を通じて明らかにせねばならない問題である。現時点においては、この川

は中井氏による人工河川より派生し、下流域において再びそれに合流するものとして考えておきたい（図9）。

(2) 南遺構群について

南遺構群において検出された弥生時代前期の溝（S D-01）、さらに古墳時代後期の集落址の一部と考えられるものとしては、大和郡山市域においては初の検出例である。今回の調査地周辺にも、これらの遺構が広範囲にわたって遺存していることは、充分考えられるので、今後は周辺地区の調査を綿密に重ねていく必要があろう。

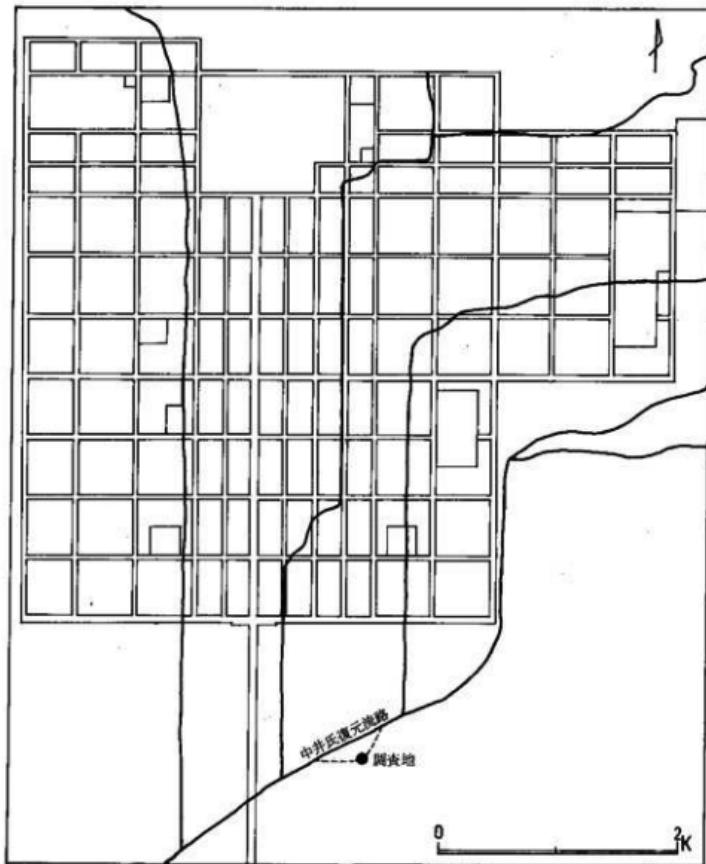


図9 平城京と主要河川（註@文献・図1を基に作成）

V 展望および課題

前章において、今回の調査地周辺における将来的な課題を若干述べたが、ここではそれらについてさらに具体的に記述し、本概報のむすびとしたい。

まず、川跡については、その北岸が今回の調査においては未検出であったが、北岸の検出は川の幅員、あるいはその正確な方向性を知るうえで、ぜひとも必要である。今回の調査地では北接して現存校舎があるため、調査区の制限があり、それを果たすことができなかつたが、隣接地を調査する際には積極的に北岸部分の検出を試みねばなるまい。また、川の性格等についても今回の調査のみでは詳細は不明である。これも周辺地の調査を通じて明らかにせねばならない。

こうした調査は、平城京に南接した地域の具体的な様相を知ることができるばかりではなく、結果的には平城京の都市計画全般を知るうえでの貴重な資料となるであろう。

また、南遺構群については、それがどの程度の平面的に拡がりをもつものであるのか、あるいは全体としてどのような性格をもつものであるのか、そのごく一部が調査されたに過ぎない現時点では全く不明である。これらについても、周辺地区的調査を通じて明らかにしてゆきたいと考える。

《註》

- ①中井一夫「碑出遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1977年度』奈良県立橿原考古学研究所（編）1978
- ③ 同 「碑田・若槻遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1980年度』奈良県立橿原考古学研究所（編）1982
- なお、「第4次」については、同「若槻庄開拓第4次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1982年度」奈良県立橿原考古学研究所（編）1983 参照。
- ⑤調査担当者である中井一夫氏の御教示による。
- ④前園実知雄「大和郡山市美濃庄出土の弥生式土器について」『青陵No.26』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（編）1972
- ⑥本章における「美濃庄」莊園に関する記述は朝倉弘「奈良県史10 莊園」奈良県史編集委員会（編）1978による。
- ⑥『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所（編）1973
- なお、S D650出土土器の絶対年代については高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌57-1』1969における見解に従うものとする。
- ⑦註②中井文献
- ⑧『平城宮出土軽瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所（編）1976
- ⑨川越俊一「大和地方の瓦器をめぐる2、3の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所（編）1983
- ⑩金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』国立歴史民俗博物館（編）1985
- ⑪服部伊久男「若槻池発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会（編）1987

VII (付章) 川跡内層序に関する報告

地質について

奥 田 尚 (奈良県立橿原考古学研究所)

現在の鹿児島湾は恰良カルデラであると言われている。中央の陥没口にできた新期の火山は今も噴煙を上げている桜島火山である。カルデラ形成前の今から25,000年前頃、すさまじい火山活動があり、九州以東に多量の火山灰を降下させている。この火山灰に相当する火山灰は、大阪、奈良、京都の盆地内で確認されている。京都では平安神宮付近の地下1~2mで層をなして観察され、奈良盆地では、郡山市内の若槻、白土、天理市二階堂、田原本町阪手、多と盆地の中心部に近い部分で、10~30cmの厚さで確認されている。この火山灰層の層序は、火山灰層の下部に比較的粗粒の火山ガラスが集まり、上部になると細粒化することから、恰良火山の爆発によって降下した時の厚さを示すものではなく、付近の山々から盆地へ流入して堆積した厚さであると言える。また、この火山灰層は炭質シルト層(泥炭)中に挟まれていることから、当時の奈良盆地は湖沼の環境であったと言える。溝々と水をたたえた盆地中央部、そして、西南方に望む二上山北西付近は石器の原石を求めて集まる旧石器人の集合地であった。このような光景を想いながら、発掘現場の地質柱状図をつくり、奈良時代~平安時代の河道堆積物の砂礫の分析を行なった。

1. 層序について

発掘地の東部に設けられた南北のトレーナーの北部と南部で、柱状図を作成した。北部ではほぼ水平に重なるが、南部では南東一北西の走向で、5°~15° 北東へ部分的に傾斜する。北側の柱状図を作成した部分では、下位より上位に向って、I・II・III・IV層に区分される。各層間は連続的な堆積でなく、時間的な間隙があったと言える。

I層：下位より中粒~粗粒砂、炭質シルト、火山灰、炭質シルトと重なる。中粒~細粒砂は青灰色で、上部になるに従って細粒となる。炭質シルト中には、單子葉植物、針葉樹等の植物遺体が含まれる。火山灰は2層含まれ、下位のものは白色で、下部が粗粒、上部が細粒となる。この火山灰は平安神宮火山灰、阪手の下位火山灰(恰良火山灰)に比較される。上位のものは1cm以下でレンズ状をなして続く場合が多く、淡茶褐色~灰白色である。

II層：下位より粘土、中粒砂、シルトと重なる。下位の粘土は青灰色で、部分的に茶褐色をなす。中粒砂は茶褐色で、レンズ状に粗粒砂部を伴う。シルトは下部が淡青灰色で、上部が茶色となり、赤褐色の斑点が散在する。

III層：下部は奈良時代~平安時代の河道跡であり、上部は13世紀以降の耕作土である。下部には砂礫が多く、上方になるにつれて細粒となり、シルト、粘土質の赤褐色土となる。シルト層より上位で耕作がなされていたようである。河道内の砂礫については後述するが、現在の菩提山川が流出

している砂礫構成に酷似する。

IV層：校舎建設時の盛土であると言われている。コンクリートブロック等が含まれる。

I層の年代は阪手の下位火山灰に相当する火山灰が含まれることから、阪手の年代測定をもとにすれば 25800 ± 1290 y.B.P (Gak-10560) となる。^①この時期は氷河時代にあたる。日本の各地にゾウが棲み、旧石器人がゾウ狩りをしていた頃にあたる。

II層の年代は阪手の年代測定をもとにすれば、 16490 ± 440 y.B.P (Gak. 10562) 以降、6000年以前となる。

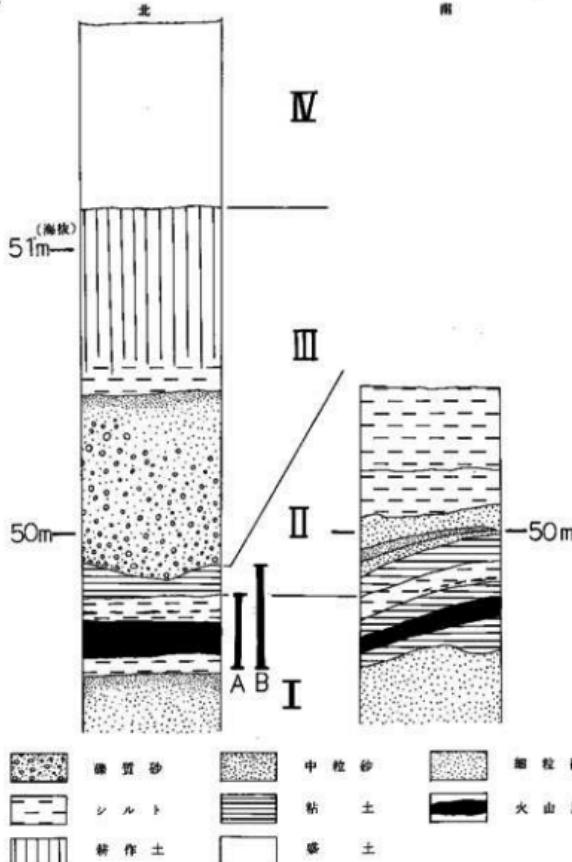


図1 柱状図 A 火山灰試料採取位置 B 植物遺体検出用試料採取位置
I—I層 II—II層 III—III層 IV—IV層

2. 河道跡の砂礫について

採取試料を水中で、 $1/16\text{mm} \sim 2\text{mm} \sim 4\text{mm} \sim 8\text{mm}$ 方眼の網を用いて篩別した。篩別後、天日で乾燥させ、砂礫の重量を台ばかりで測定した。粒径が 8mm 以上のものは石種別に個数、重量、最大径を測定した。 8mm 未満のものは種別し、量を個数的に、ごくごく僅か、ごく僅か、僅か、中、多い、非常に多いの6段階に区分した。また、礫形については、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。

表1 砂礫の粒度

粒 径 (mm)	$\frac{1}{16} \leq < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	$8 \leq <$	合 計
重 量 (g)	1,340	440	210	830	2,820
百 分 率 (%)	47.5	15.6	7.5	29.4	100.0

粒径と重量の関係は1に示すように砂が約5割、礫が約5割を占めている。

砂礫種は岩石として、黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、ペグマタイト、閃綠岩、斑駁岩、流紋岩、チャート、片麻状黒雲母花崗岩、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石であり、土器片がごくごく僅かに含まれる。

表2 砂礫種の構成

砂礫種	粒 径 (mm)	$\frac{1}{16} \leq < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	$8 \leq$
黒 雲 母 花 崗 岩	ごく僅か	多い	多い	52個	
白 雲 母 花 崗 岩				6個	
ペ グ マ タ イ ト				4個	
閃 綠 岩			ごくごく僅か	4個	
斑 駁 岩		僅か	僅か	36個	
流 紋 岩				1個	
チ ャ ー ト	ごく僅か	ごく僅か	僅か	22個	
片 麻 状 黒 雲 母 花 崗 岩				24個	
石 英	多い	多い	僅か		
長 石	ごく僅か	僅か	僅か		
黒 雲 母	ごく僅か				
角 閃 石	ごくごく僅か				
土 器 片			ごくごく僅か	4個	

砂礫種の特徴について述べる

黒雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形が角、亜角、最大径が 43mm である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が $2\text{mm} \sim 8\text{mm}$ 量が中である。長石は灰白色、粒径が $2\text{mm} \sim 6\text{mm}$ 量が少である。

mm、量が中である。黒雲母は黒色板状、粒径が2 mm～3 mm、量がごくごく僅かである。

白雲母花崗岩：色は灰白色、灰色で、礫形が亜角、亜円、最大径が43 mmである。造岩鉱物は石英、長石、白雲母である。石英は無色透明、粒径が1 mm～3 mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2 mm～8 mm、量が非常に多い。白雲母は無色透明、粒径が0.5 mm～1 mm、量がごくごく僅かである。

ベグマタイト：色は白色、礫形が亜角、最大径が37 mmである。ベグマタイト構造を示すものや長石のかたまり、石英のかたまり、石英のかたまりに近いものがある。

閃綠岩：色は灰白色、灰色で、礫形が角、最大径が17 mmである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒径が1 mm～1.5 mm、量がごく僅かである。長石は灰白色、粒径が2 mm～5 mm、量が多い。黒雲母は茶褐色、粒径が0.5 mm～1 mm、量がごく僅かである。角閃石は黒色、粒径が1 mm～3 mm、量が僅かである。

斑駁岩：色は暗灰色、礫形が亜角、亜円、最大径が57 mmである。造岩鉱物は長石、角閃石、輝石である。長石は白色、粒径が2 mm～3 mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が1 mm～2 mm、量が多い。輝石は黒色、粒径が2 mm～5 mm、量が僅かである。細粒の斑駁岩は変輝綠岩と識別できない。

流紋岩：色は灰色、礫形が亜角、礫径が18 mmである。石英は無色透明、自形で璇晶をなす。最大径は3 mmで、量が多い。長石は白色、粒径が1.5 mm～1 mm、量がごくごく僅かである。石基はガラス質で固い。

チャート：色は灰白色、暗灰色で、礫形は亜角、最大径は33 mmである。

片麻状黒雲母花崗岩：色は灰色、暗灰色で、礫形が亜角、最大径が55 mmである。片麻状溝造が顯著である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1 mm～1.5 mm、量が非常に多い。長石は灰白、粒径が0.5 mm～1 mm、量が中である。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5 mm以下で、量が僅かである。

石英：無色透明、粒径が角である。

長石：灰白色、白色で、粒径が角である。

黒雲母：黒色・金色板状である。

角閃石：黒色粒状で、粒径が角である。

以上のような特徴をもつ岩石の分布地について述べる。当遺跡の北方や西方の丘陵地には新生代新第三紀～第四紀の地層が分布し、花崗岩質岩やチャート礫が多く含まれる。東方の菩提山川流域には黒雲母花崗岩、閃綠岩～斑駁岩、片麻状花崗岩が分布し、北緯尾～南緯尾にかけてベグマタイトが部分的に分布する。また、流山部にあたる丘陵地には段丘礫層が分布し、チャート等が含まれる。東北方の春日山付近から流出する河川の礫には安山岩礫が含まれる。以上のことから、Ⅲ層下部の砂礫は現在の菩提山川の砂礫に酷似する。現在の菩提山川流域から流出した砂礫であると考えられる。

〔註〕 ①『阪手遺跡』奈良県遺跡概報 1982年度 奈良県立橿原考古学研究所

大和郡山市美濃庄町平和小学校地下の火山灰層対比

趙 哲 濟 ((財) 大阪市文化財協会)

1. はじめに

美濃庄町の南西に隣接する若槻町の地下には、低位段丘層相当層中に2層の火山灰層が挟まれている（権原考古学研究所、1983）。後期更新世～完新世における近畿地方中部の火山灰層序を検討した吉川ほか（1986）は、この2層の火山灰層が、下位より平安神宮火山灰層、鬼虎川火山灰層に対比されることを明らかにした。

本調査地（美濃庄町平和小学校）においても、いわゆる洪積層中に2層の火山灰層が挟まれている。これらは前述の2火山灰層と層序関係・層相が酷似することから、同一の火山灰層が連続して分布しているものと考えられる。

そこで、ここでは、美濃庄町の2火山灰層の層相・岩石的性質を記載し、若槻町の火山灰層との対比を検討する。試料の処理と記載方法は吉川（1976）・吉川ほか（1986）にはば従い、鉱物組成、火山ガラスの形状・屈折率、重鉱物組成について比較検討する。

2. 火山灰層の記載

本調査地の2層の火山灰層は、基本層序の第Ⅰ層の上部を構成する泥炭質粘土層中に挟まれている（IV-1参照）。試掘採取地点の柱状図を第1図に示す。この地点では、第Ⅰ層は第Ⅱ層を構成する奈良～平安時代の遺物を含む河川堆積物によって直接覆われているため、第Ⅱ層は欠如している。

a 美濃庄町下位火山灰層（邵⑨*）

層相：層厚5～13cm（平均10cm）で下部2～3cmが比較的粗粒の淡黄色ガラス質火山層である。斜交葉理が発達し、中部に暗灰色シルト薄層を挟む。本層と下位の一部泥炭質・暗灰色シルト質粘土層とは、堆積異常が認められ、葉理の変形・層厚の変化が著しい。

鉱物組成：多量のガラス（92%）と微量の結晶（主に斜長石）からなる。

ガラス：無色透明・扁平型主体（58%）で屈折率 $n = 1.498 - 1.502$ （モード1.500）を示す。

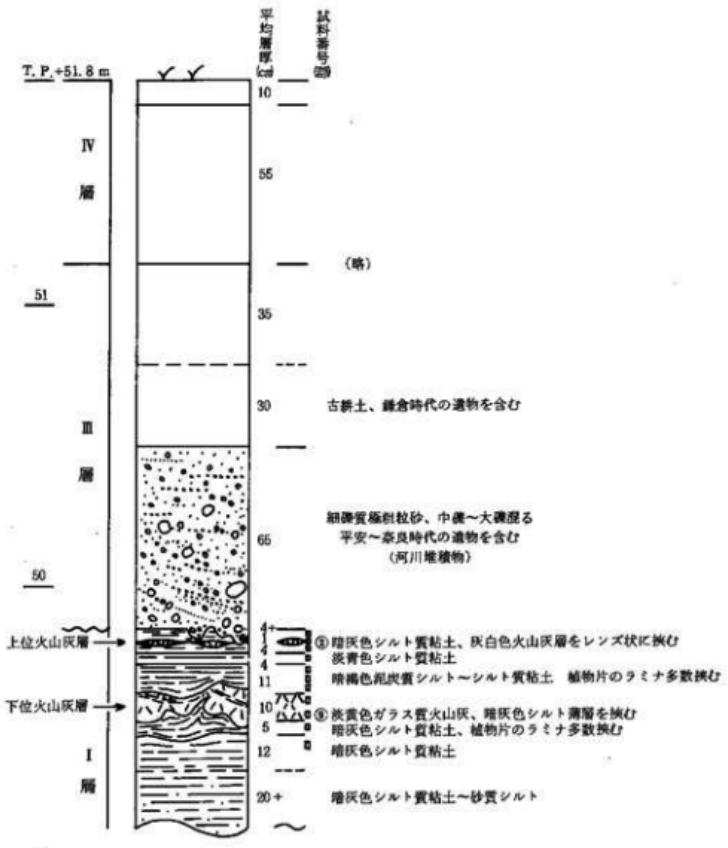
重鉱物組成：斜方輝石（51%）>角閃石（24%）>不透明鉱物>単斜輝石・他、からなる。

b 美濃庄町上位火山灰層（邵⑩*）

層相：下位火山灰層の上位10～18cmにあり、層厚1cmのレンズ状で灰白色・細～中位・ややゴマシオ状の火山灰層である。

鉱物組成：ガラスと結晶（主に斜長石、角閃石）からなる。

ガラス：無色～白色・多孔質～中間型（86%）で屈折率 $n = 1.500 - 1.504$ （モード1.503）を示す。



第1図 美濃庄町平和小学校火山灰採集地点柱状圖

重鉱物組成：角閃石（60%）>斜方輝石（35%）>不透明鉱物・他からなる。

*分析した試料の採取番号、第1図参照。

3. 火山灰層の対比

樺原考古学研究所（1983）・吉川ほか（1986）によれば、若櫻町の2層の火山灰層は、低位段丘層相当層に属する泥炭層の上部に挟まれている。下位の火山灰層は層厚12~14cm・黄白~灰白色で下部5~7cmが粗粒であるとされる。また、下位火山灰層の上7~9cmにある上位の火山灰層は、層厚0~1cm・白色・細~中粒でレンズ状であるとされる。これらの層序関係・層相の特徴は、美濃庄町の下位・上位火山灰層のそれと酷似する。

次に、各地の火山灰の岩石記載的性質を第1表に示す。

美濃庄町・若櫻町両地域の下位火山灰層は、鉱物組成が共にガラス主体で90%以上を占めること、ガラスの性質は無色透明で扁平型が共に60%前後を占めること、屈折率は前者が $n = 1.498 \sim 1.502$ 、後者が $n = 1.499 \sim 1.501$ でモードが共に1.500であること、重鉱物組成が共に斜方輝石（50%前後）>角閃石>不透明鉱物>单斜輝石・他であること、など、岩石記載的性質がよく一致する。

また、美濃庄町・若櫻町両地域の上位火山灰層は、鉱物組成が共に斜長石・ガラス>重鉱物からなること、ガラスの性質は無色~白色で多孔質~中間型が共に90%前後を占めること、屈折率は前者が1.500~1.504、後者が1.502~1.504でモードが共に1.503であること、重鉱物組成が共に角閃石（60%前後）>斜方輝石>不透明鉱物>他であること、など、岩石記載的性質がよく一致する。なお、前者の屈折率の低い方の値が後者より低いのは、下位火山灰層に由来するガラスの混入が推定される。

したがって、美濃庄町の下位・上位火山灰層は、それぞれ若櫻町の下位・上位火山灰層と同一の火山灰層であると考えられ、対比される。その結果、吉川ほか（1986）にもとづいて、美濃庄町下位火山灰層は京都市の平安神宮を模式地とする平安神宮火山灰層に、美濃庄町上位火山灰層は東大阪市の鬼虎川遺跡を模式地にする鬼虎川火山灰層に対比される。

4. まとめ

美濃庄町平和小学校の地下に分布する下位・上位火山灰層の層序・層相・岩石記載的性質を検討し、吉川ほか（1986）にもとづいて、若櫻町の火山灰層と対比した。その結果、下位火山灰層は平安神宮火山灰層に、上位火山灰層は鬼虎川火山灰層に対比されることが明らかとなった。

本報告の主題は、平安神宮火山灰層・鬼虎川火山灰層に関する從来の知見に、分布地点をひとつ追加したのにとどまるが、両火山灰層は広くセットで追跡できることから、古地理・古気候・古植生の復元をはじめとして、最終氷期の奈良盆地にまつわる諸問題を解明する手がかりを与えてくれる、層位学的に極めて有効な鍵層である、といえよう。

本報告をまとめるにあたって、大阪市立大学理学部の吉川尚作氏には、試料の処理・記載方法に

第1表 火山灰の岩石記載的性質*

鬼虎川火山灰層

位 置	試 料 番 号	組物組成(%)			ガラス						重 鉱 物 組 成(%)						斜方輝石の 屈折率(τ) (モード)	備 考	
		ガ ラ ス	斜 長 石	重 鉛 英 物	形 状(%)	晶 面 中 間 固 定 型	中 間 固 定 型	その 他の 形 状	屈 折 率(n) (モード)	角 閃 石	斜 長 石	單 斜 輝 石	黑 雲 母	ジ ル コ ン	佛 灰 石	不 透 明 鉱 物			
		ラ ス	石	英 物															
東大阪市鬼虎川	O13M	44	37	2	17	18	30	42	12	1.500~1.504 (1.502)	66	20	0	2	0	2	10	1.704~1.710 (1.705~0.08)	模式地
磯城郡田原本町阪手	N4M	50	31	1	8	3	30	60	7	1.502~1.508 (1.503)	56	30	0	3	0	1	10	1.703~1.709 (1.704~0.07)	
大和郡山市若槻町	N2U	25	53	3	19	1	48	48	2	1.502~1.504 (1.503)	65	23	0	1	0	0	11	1.703~1.708 (1.704~0.07)	若槻町 上位火山灰層
大和郡山市美濃庄町	郡③	42	40	0	18	2	32	54	12	1.500~1.504 (1.503)	60	35	0	0	1	1	4	——	美濃庄町 上位火山灰層

平安神宮火山灰層

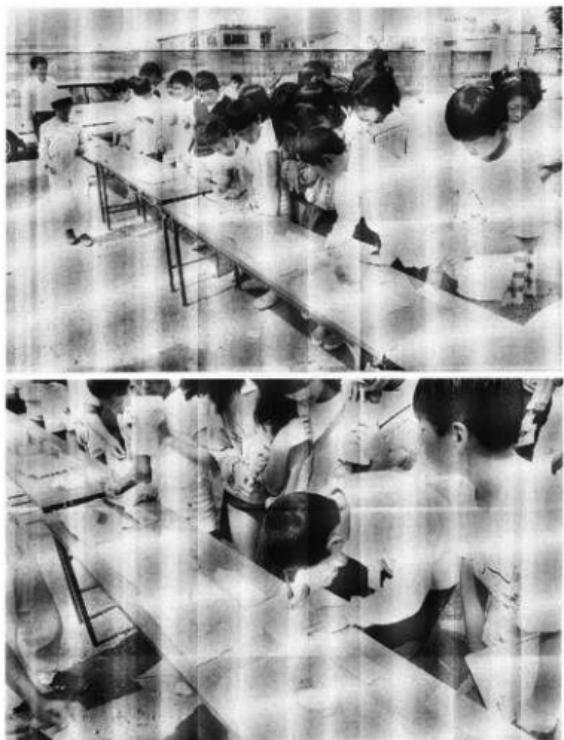
京都市平安神宮	K4	98	2	0	0	74	22	3	1	1.498~1.501 (1.500)	12	54	17	1	0	0	15	1.704~1.737	模式地
磯城郡田原本町阪手	N4L	96	3	0	1	69	26	5	0	1.499~1.501 (1.500)	10	68	2	1	0	0	19	1.703~1.735	
天理市福住町並松	N6	98	2	0	1	60	37	3	0	1.499~1.501 (1.500)	20	59	9	1	0	0	11	1.702~1.738	
大和郡山市若槻町	N2L	97	2	0	1	64	33	3	0	1.499~1.501 (1.500)	32	49	2	1	1	0	16	1.703~1.735	若槻町 下位火山灰層
大和郡山市美濃庄町	郡③	92	6	0	2	58	33	9	1	1.498~1.502 (1.500)	24	51	6	0	2	2	16	——	美濃庄町 下位火山灰層

* 試料番号一部①・②以外の分析結果は、吉川ほか(1986)による。

について御指導・御教示いただいた。記して謝意を表する。

<引用文献>

- 樺原考古学研究所(1983)若槻庄間達第4次発掘調査概報 奈良県遺跡調査概報1982年度第2分冊, 322~324.
 吉川周作(1976)大阪嶺群の火山灰層について。地質学雑誌, 82, 497~515.
 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和(1986)近畿地方中部に分布する後期更新世~完新世の火山灰層について。地球科学, 40, 18~38.



「すごいなあ」 出土遺物に熱心に見入る平和小学校の児童たち

図 版



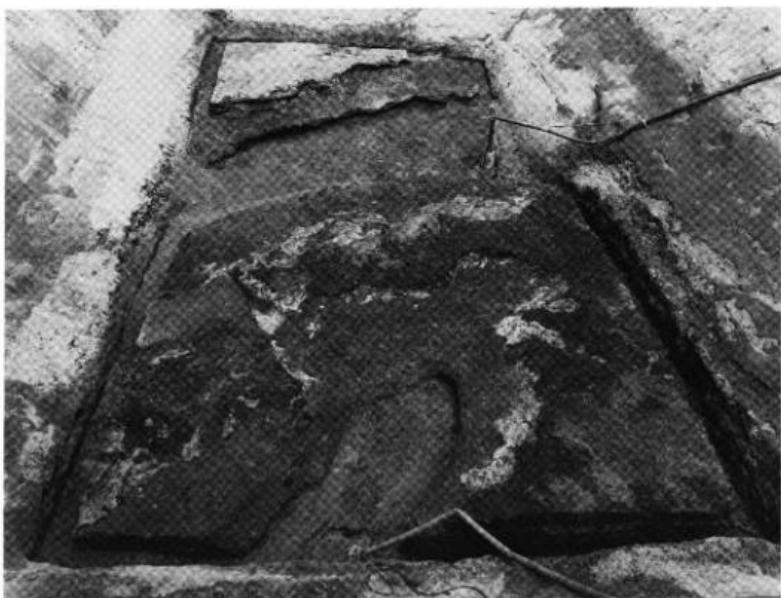
1. 調査地遠景

（南上空より）



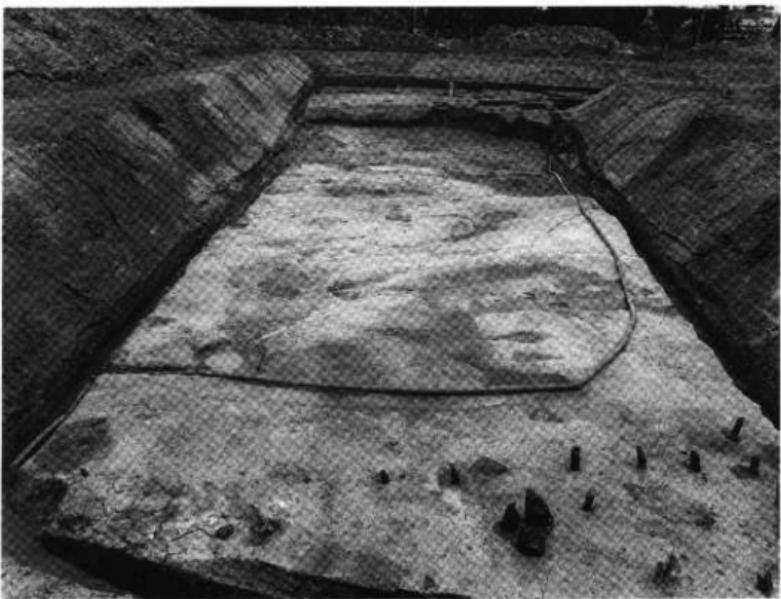
2. 第2次調査トレンチ全景

（南上空より）



1. 第Ⅲトレンチ河床面検出状況

(南より)



2. 第Ⅳトレンチ河床面検出状況

(北より)



1. 第IV レンチ河床面検出状況

(南より)



2. 川跡南岸部分土層断面

(東より)



1. 第IVトレンチ南遺構群全景

(西より)



2. 同上

(東より)



1. SD-01土層断面

(南より)



2. P-01遺物出土状況

昭和63年3月31日

大和郡山市文化財調査概要 9

美濃庄遺跡(四反田地区)

発掘調査概要報告書

編集行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市橋本町36番地
